様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２５１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２９５８

研究課題名（和文）幼児の談話能力発達評価法の作成と言語発達支援への応用

研究課題名（英文）Development of an Assessment Scale for Discourse Skills in Preschool Children and Support for Children with Special Needs

研究代表者
瀬戸　淳子（SETO, Junko）

帝京平成大学・健康メディカル学部・教授

研究者番号：７０４３８９８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：幼児期後期の談話能力は、学童期の学習や読み書きとの関連性も示唆される重要な言語発達スキルであるが、発達プロセスや評価の方法については十分に研究が進んでいない。本研究では、前研究の基礎研究を発展させて調査を進め、談話能力の発達評価に有用な課題、発達指標、基準を確定して、5種類（文の復唱、事象系列、遊びルール、状況絵、物語再生）の課題からなる談話スキルの発達アセスメントスケール（AcNas）を作成した。また、談話スキルの発達は個人差が大きいため、パーセンタイル順位の推定値を発達プロフィールとして図示することで、対象児の該当年齢群における位置づけが把握しやすく、支援に有効であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で作成したアセスメントスケールは、語彙や統語といった言語知識に関する既存の言語発達検査とは質的に異なる、談話能力の発達を評価する新たなツールである。質的に異なる複数の課題を設定して、幼児期後期の談話能力を多面的に捉えようとしており、課題ごとの結果から談話能力の発達プロフィールを把握することができる。本研究で作成された談話能力の発達評価スケールと、語彙や統語に関する既存の言語発達検査を組み合わせることで、幼児の会話期の言語発達をより包括的にとらえることが可能となり、日常的、専門的な言語発達支援に結び付けられることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：Early detection of problems in preschool children's discourse skills is essential for identifying children at risk for school-age learning and literacy-related difficulties. However, the developmental process of discourse skills and assessment methods has yet to be adequately studied in Japan. In this study, we conducted research to determine tasks, developmental indicators, and criteria helpful in assessing the development of discourse skills, and we developed an assessment scale for children's discourse skills (AcNas) consisting of five tasks (sentence repetition, event sequence, rules of play, situational pictures, and story retelling). The level of development of discourse skills was shown to be easier to ascertain by illustrating estimates of percentile rank in the relevant age group of children to clarify whether support is needed.

研究分野：臨床発達心理学、言語コミュニケーション障害学

キーワード：談話能力　幼児期　発達アセスメント　ナラティブスキル　AcNas

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

幼児期の談話能力は、学童期の学習や読み書きとの関連性が示唆され、幼児期後期の重要な言語発達スキルであるが、わが国では談話に関する発達研究が少なく、その発達プロセスや評価の方法については十分に研究が進んでいない。瀬戸・秦野（2019）の研究では、保育教育現場で相談ニーズが高い幼児期後期のコミュニケーション能力の評価指標の作成を目指して基礎研究を進めた。そして試作した課題について一定の妥当性が示され、既存の語彙などの言語検査とは質的に異なる言語能力を評価していることが示唆された。しかし、個人差も大きく、コミュニケーション能力の標準的な基準値の確定には対象者の偏りがあり、さらに対象者を増やして調査をする必要があった。また、評価法として確立させるためには、発達の方向性や談話内容の判断がより明瞭な課題に絞って研究を進める必要性が残った。そこで本研究では談話能力に焦点を当て、談話の組織化の程度とコンテクスト依存度の異なる課題に絞って研究を進めることにした。

２．研究の目的

幼児期後期の子どもの談話能力の問題を早期に把握することは、学童期に学習や読み書きに関連した困難を引き起こす可能性のある子どもを特定するために特に重要である。本研究では、前研究の基礎研究をもとに調査を進め、談話能力の発達評価法を作成することを目的とした。

（１）談話能力に関係する 5 種類の課題による調査分析をもとに、談話能力の発達評価に有用な下位評価課題、発達指標、評価基準を確定して、各課題の談話スキルの発達のプロセスを明らかにし、談話能力の発達評価スケールを作成する。

（２）保育現場で適応上の困難があり談話レベルの発達の遅れを示す特別な支援を必要とする児に対し、作成した談話能力発達評価スケールを実施し、作成した評価スケールの有効性や評価スケールを活用した言語発達支援モデルを検討する。

３．研究の方法

（１）研究の対象、手続き、分析資料

施設長と保護者の研究の同意が得られ、調査を実施した幼稚園年少・年中・年長幼児を対象とした。基礎研究の対象児も含め、研究対象は 203 名である（4 歳前半 22 名、4 歳後半 35 名、5 歳前半 35 名、5 歳後半 43 名、6 歳前半 34 名、6 歳後半 34 名）。特別な配慮を必要とする児は、研究代表者・分担者が関わっている自治体の保育巡回相談を受けた児の中から、施設長と保護者の研究協力の同意が得られ、談話レベルの発達の遅れを示す保育園年長児を対象とした。

調査は対面で個別に実施した。瀬戸・秦野（2019）の研究で使用した課題の内、談話能力の発達評価に有用な課題、項目を選定して本研究の調査課題とした。また、語彙力の評価のために、対象児の内 120 名に対しては PVT-R 絵画語い発達検査、KABC-IIの語彙尺度課題（表現語彙、なぞなぞ、理解語彙）を実施した。すべての発話は IC レコーダーに録音し、調査で得られたすべての発話のトランスクリプトと語彙検査の結果を分析の対象とした。

また特別な支援を必要とする児については、談話能力の発達特性を踏まえた言語発達支援案を事例的に検討するために、保護者の同意を得て、保育巡回相談時の保育活動の観察記録や発達検査記録を研究資料として分析の対象とした。

（２）5 種類の談話能力評価課題の内容

談話能力を評価する 5 種の課題（図 1）と手続きは以下の通りである。

①文の復唱：文の記憶課題で、WPPSI の補充問題であった文章課題を参考に一部の語を改変して課題とした。手続きは、練習を実施した後、4～8 文節からなる 10 問題文を提示された通りに復唱をしてもらった。

②事象系列：日常経験の中で獲得するスクリプト知識に関する課題で、表出課題の後に、理解課題として絵図版並べ課題がある。表出課題 3 問は、事象の最初と最後の内容を示す絵図版を提示し、その間の行為を順番に話してもらった。理解課題 3 問のうち、1 問は練習問題、2 問を評価の対象とした。表出課題で基準に達していない場合、活動の最初と最後の内容を示す絵図版の間に 4 枚の絵図版を時系列に並べてもらい、その後図版を見ながら話してもらった。

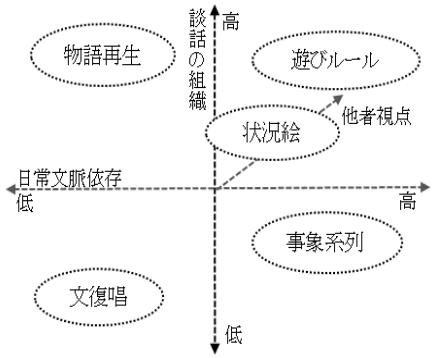

図１　5 種類の談話能力評価課題の構成

③遊びルール：遊び体験から得る日常的事象の知識に関する課題で、自分の体験する事象をどのように知識の中に取り入れ構造化して語るのかを捉える。ここでは、日常よく体験する 3 つの遊びの遊び方を説明してもらった。
④状況絵：複数の人物が解決すべき困難に直面している葛藤状況が描かれている一枚の絵図版を見て、その葛藤状況を説明する課題であり、3 課題ある。語りには他者の意図や感情などの他者の視点の理解も含まれる。
⑤物語再生：絵本「クレヨンのはしご」（板橋敦子著　ひさかたチャイルド発行）から、出版社及び著者の承諾を得て字のない紙芝居を作成した。4 分の録音音声を聞かせながら紙芝居を見せた後、絵を見せずに紙芝居の内容を話してもらった。物語は 5 場面構成で、絵を描くのが大好きな男の子が、どこにでも描ける魔法のクレヨンではしごを作り、雷の国に行って、壊れたはしごを描き直して家に戻ってくる、という内容である。

４．研究成果
（１）談話能力の発達プロセスの分析と談話能力の発達評価法の作成
子どもの語りの分析をもとに、談話能力の発達評価に有用な下位課題、発達指標、評価基準を確定し、5 種類の課題から成る発達アセスメントスケールを作成した。

＜各課題の発達評価指標と発達過程＞
①文の復唱
評価用とした 10 問題文は課題ごとに難易度が異なり、課題による識別性が高い。各課題とも、すべての文節を正確に復唱できた場合に得点化をし、1 文節以内の誤りには部分点を付与して文の復唱得点を算出した。
各年齢群の得点の推移（図 2）をみると、各年齢群とも個人差が大きいが、4 歳後半から 6 歳にかけて文の復唱得点の中央値は徐々に上昇する様子がみられた。誤りとしては、省略、語の置換、付加、転位、助詞の誤り等のほか、「食べすぎると」を「いっぱい食べると」など意味的に近い表現への言い替え反応がみられた。

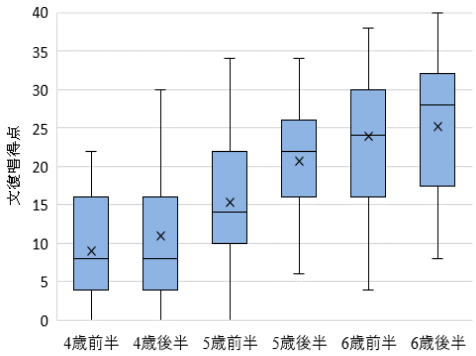

図 2 文の復唱得点の平均値・4 分位数の推移

②事象系列
表出課題は語りの分析（周辺事象を含む）から、各課題 4 つの中核的な事象行為を抽出し得点化した。理解課題は、時系列順に図版並べられたかどうかで得点化を行った。
表出課題と理解課題の得点を合計した事象系列総合得点の推移を図 3 に示した。特に 5 歳前半は得点のばらつきが大きくなり、その後 5 歳後半以降、一定の水準に収束する様子がみられた。語りの特徴としては、初期は語られる行為数も少なく一部の事象に焦点化した語りであった。発話数の増加とともに、個人的経験・周辺事象の語りも増加するが、次第に一般的な中核事象を中心に語りが集約される様子が窺われた。

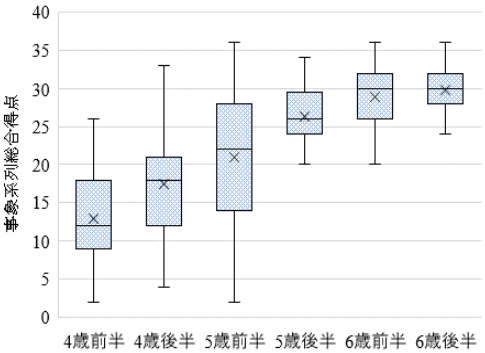

図 3 事象系列総合得点の平均値・4 分位数の推移

③遊びルール
各課題の語りに含まれる事象内容の分析から、遊びの設定、開始ルール、骨格ルール（当該の遊びの独自性 2 項目）、終了ルールの 5 行為を抽出し、一部重みづけをして得点化した。
各年齢群の得点の推移（図 4）をみると、徐々に得点は上昇するが、遊びルール得点の中央値は 5 歳後半から 6 歳にかけて大きく上昇し、6 歳で一定の水準に到達する様子がみられた。いずれの遊びも幼児期の集団生活での新しい体験であり、集団生活での楽しい遊びに参加することを通して、または、楽しく遊びに参加するためにそこでの決まりやルールを記憶し、事象知識として構造化し、語ることが示された。

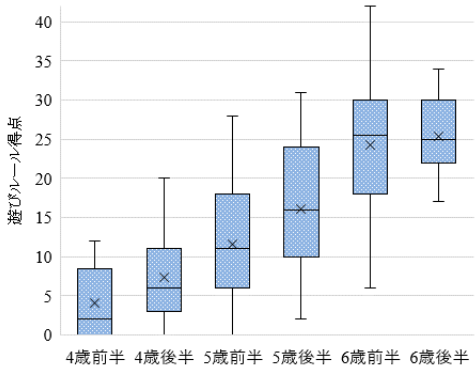

図 4 遊びルール得点の平均値・4 分位数の推移

④状況絵

各課題の語りの分析から、状況絵の説明に必要な 5 つの構成要素（導入、先行事象、中核事象、後続事象、評価・結論）を抽出し、一部重みづけをして得点化した。

各年齢群の得点の推移を図 5 に示した。半年ごとの年齢群での得点の推移をみると 6 歳後半児は群内で年齢の低い対象児が多くばらつきが大きいためか、6 歳前半より中央値がやや低くなった。対象児を増やすことで偏りがなくなると考えられる。本課題の語りには絵に描かれている背景情報、因果関係、事象系列などを統合して語る必要があり、他の課題に比較して難しい課題であることが示唆された。

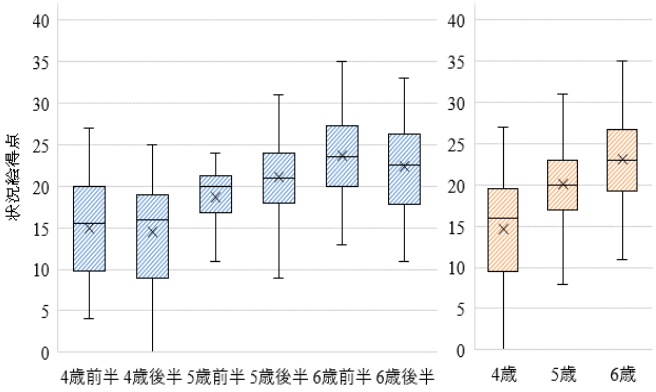

図 5 状況絵得点の平均値・4 分位数の推移

⑤物語再生

物語のマクロ構造と談話構造（ミクロ構造）の視点から語りを得点化した。マクロ構造は、物語の 5 場面から、物語構造として特に重要なエピソード 5 つ（導入部、物語のターニングポイントとなる重要な 3 つの出来事、解決部の出来事）を抽出し得点化した。6 歳児の半数以上は 4～5 エピソードを語っており、物語構造がかなり明確な語りになっている様子が窺われた。

談話構造は、談話の構成要素から評価をした。物語を構成する意味的まとまりをもった 38 述語文から物語の筋だてに必要な 10 の基本命題（各命題は接続語でつながる 2 つの節から構成）を抽出した。そして、それぞれの命題に不可欠な 2 つの述語と 2 つの要素（項）を抽出し得点化をし、それぞれの得点を合計して談話構造の総合点とした。各年齢群の談話構造総合得点の推移（図 6）をみると、5 歳前半から 6 歳にかけて中央値が大きく上昇し 6 歳で一定の水準に収束する様子がみられた。6 歳にはある程度まとまりをもった語りができるようになるが、まだ接続語の種類が少なく不適切な使用もみられ、適切な表現での語りができるまでにはもう少し時間がかかると考えられた。

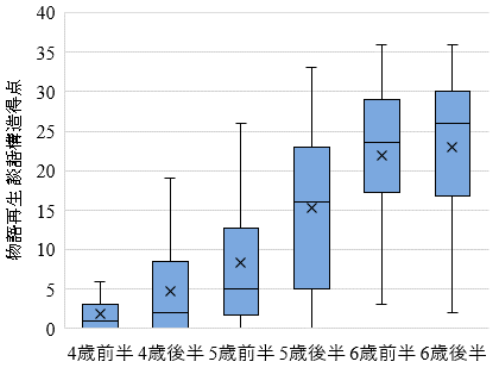

図 6 物語再生 談話構造総合得点の平均値・4 分位数の推移

以上のように、5 種類の課題は発達のずれがみられながら 6 歳で一定の水準に達することが明らかになった。談話スキルの発達は個人差が大きいため、得点評価は平均値よりもパーセンタイル値でとらえるのが有効であり、パーセンタイル順位の推定値を発達プロフィールとして図示することで、対象児の該当年齢群における位置づけが把握しやすいと考えられた。以上の結果をもとに、談話能力のアセスメントスケール（AcNas: Assessment Scale for Children’s Narrative Skills）（図 7）を作成した。AcNas は質的に異なる 5 種類の課題からなり、会話期の談話能力を多面的に評価することができることが示された。

図 7　AcNas：アセスメントスケール

＜課題間の関係性と語彙尺度との関係性＞

①談話能力評価課題間の関係

5 種類の課題スキル間の関係性をみるために、月齢、および他のすべての変数の影響を取り除いた 2 変数間の偏相関係数を求めた。0.20 以上の弱い偏相関係数がみられたものは、遊びルールと物語再生（0.35）、物語再生と文復唱（0.26）、遊びルールと状況絵（0.23）、状況絵と事象系列（0.20）であった。弱い相関はみられるもののそれぞれ異なるスキルを評価していることが示唆された。また、その他のすべての変数の影響を取り除いて月齢との弱い偏相関がみられたのは、日常経験を事象知識として構造化し言語化することが求められる遊びルール（0.38）と事象系列（0.27）課題、ワーキングメモリと関係する文の復唱課題（0.22）であった。

②語彙スキルとの関係性

語彙スキルと 5 種類の課題スキルの関係性を検討するために、言語検査を実施した 120 名を対象に、月齢および他のすべての変数の影響を取り除いた、語彙尺度と 5 種類の各課題との 2 変数間の偏相関係数を求めたところ、KABC-IIの「なぞなぞ」の粗点と文の復唱得点には 0.23 の弱い偏相関があったが、その他の語彙尺度との変数間の偏相関は無く、既存の言語発達検査とは異なる言語スキルを評価していることが示唆された。

（２）談話レベルの困難さと園生活の適応に困難を抱える児の評価と支援

図 8 は、園生活の適応に困難を抱える事例の AcNas の結果を図示したものである。本事例は絵や文字からの語彙や一般的知識は高く、PVT-R 語彙発達検査や KABC-IIの語彙尺度ではいずれも評価点が平均～平均以上の高い語彙スキルを持ち文法にも特に問題はみられないが、話は一方的で、会話はできるが語用論上のずれがみられた。

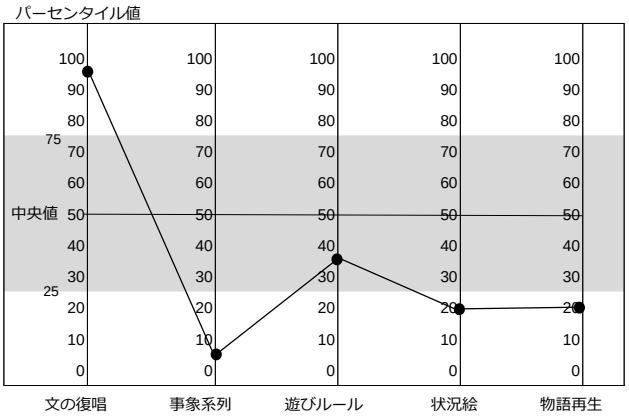

図 8　AcNas：発達プロフィール

AcNas の結果から、文の復唱力は非常に優れている一方で、日常生活で経験する事象や人との関わりの中で生じている出来事を順序だてて説明したり、事象における対象間の関係性や状況を捉えて統合して語ったりする談話能力の弱さが顕著であることが示された。この結果から、社会性や生活力を育てる中で、他者とのやり取りを通して生活経験についての語りを積み重ねていく支援へとつなげられた。

このように、AcNas は日常にみられる言語コミュニケーションにおける語用論的側面を効果的に反映しており、既存の言語発達検査と組み合わせることで、会話期の子どもの言語発達を包括的にとらえることが可能となり、日常的、専門的な言語発達支援に結び付けられることが示された。

（３）総括

本研究では、談話能力の発達プロセス、評価方法について検討するため、前研究で作成したコミュニケーション能力に関連する課題のうち、談話能力に焦点を当て、談話の組織化の程度とコンテクスト依存度の異なる 5 種類の課題に絞って研究を進めた。そして課題ごとの発達プロセスを分析するとともに、それぞれの課題の発達指標を確定し、会話期に入った子どもに対する談話能力を評価するスケールを作成した。また、少人数ではあるが、談話レベルの発達の遅れをもち園生活の適応に困難を抱える児を対象に AcNas を実施した結果の分析から、既存の言語発達検査と組み合わせて実施することで、より一人ひとりの言語発達特性が明らかになり、支援に有効であることが示された。本研究はコロナ感染拡大の影響を受け、調査が制限された。今後機会があれば対象者を追加し 6 歳後半児群の月齢の偏りを検討したい。また、普及のために AcNas のタブレット版などの作成も検討していきたい。

＜引用文献＞

①瀬戸淳子、秦野悦子、幼児期のコミュニケーション能力発達評価法の作成と実用化に向けた研究、平成 27～30 年度科学研究費助成事業研究成果報告書、2019

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計22件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 幼児期の事象系列の語りの発達評価
３．学会等名 日本教育心理学会第65回総会
４．発表年 2023年

１．発表者名 秦野　悦子、瀬戸　淳子
２．発表標題 幼児期における「遊びルールの説明」の発達評価
３．学会等名 日本教育心理学会第65回総会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Seto Junko, Hatano Etsuko
２．発表標題 Development of Storytelling in Young Children
３．学会等名 European Conference on Developmental Psychology (ECDP2023)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hatano Etsuko, Seto Junko
２．発表標題 Development of Narrative Skill in Young Children
３．学会等名 European Conference on Developmental Psychology (ECDP2023)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 幼児期における「物語再生」の発達評価と語彙尺度の関係　－AcNasを用いたナラティブスキルの発達アセスメント－
３．学会等名 日本発達心理学会第35回大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 秦野　悦子、瀬戸　淳子
２．発表標題 幼児期における「状況絵」の語りの発達評価と語彙尺度の関係　－AcNasを用いたナラティブスキルの発達アセスメント－
３．学会等名 日本発達心理学会第35回大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 4～6歳児における「朝の支度」行為の語りの発達　談話能力発達評価法作成に向けての基礎研究
３．学会等名 日本教育心理学会第64回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 幼児の事象系列の語りの特徴(2)　談話能力発達評価指標作成に向けての基礎研究
３．学会等名 日本心理学会第86回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 幼児期における物語のリテリングの発達　談話能力発達評価法作成に向けての基礎研究
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 秦野　悦子、瀬戸　淳子
２．発表標題 幼児期における状況絵の語りの発達　談話能力発達評価法作成に向けての基礎研究
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 幼児期における行動系列の語りの特徴　　―談話能力発達評価指標作成に向けての基礎研究―
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 幼児の文復唱の発達と言語尺度との関係　談話能力発達評価法作成に向けての基礎研究
３．学会等名 日本発達心理学会第33回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 秦野　悦子、瀬戸　淳子
２．発表標題 幼児期における状況絵の語りの特徴　談話能力発達評価法作成に向けての基礎研究
３．学会等名 日本発達心理学会第33回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 幼児の物語の再話の特徴 ―ナラティブ発達評価指標作成に向けての基礎研究―
３．学会等名 日本心理学会第84回総会
４．発表年 2020年

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 6歳児における物語の再話の特徴　談話能力発達評価法作成に向けての基礎研究
３．学会等名 日本発達心理学会第32回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Seto Junko, Hatano Etsuko
２．発表標題 Development of Story Retelling Skills in Preschool Children
３．学会等名 19th European Conference on Developmental Psychology（ECDP）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hatano Etsuko,Seto Junko
２．発表標題 Development of Narrative Skills in Preschool Children
３．学会等名 19th European Conference on Developmental Psychology（ECDP）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 4～6歳児におけるナラティブの発達と言語知識との関係　―ナラティブ発達評価指標作成に向けての基礎研究―
３．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 秦野　悦子、瀬戸　淳子
２．発表標題 4～6歳児における状況絵の語りの発達　―ナラティブ発達評価指標作成に向けての基礎研究―
３．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 4～6歳児における物語の再話の発達　ナラティブ発達評価指標作成に向けての基礎研究
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 瀬戸　淳子、秦野　悦子
２．発表標題 AcNasを用いたナラティブスキルの発達アセスメント（１）5種類の課題からみる幼児期の発達過程
３．学会等名 日本教育心理学会第66回総会
４．発表年 2024年

１．発表者名 秦野　悦子、瀬戸　淳子
２．発表標題 AcNasを用いたナラティブスキルの発達アセスメント（２）園生活の適応に困難を抱える事例
３．学会等名 日本教育心理学会第66回総会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	秦野　悦子 (HATANO Etsuko) (50114921)	白百合女子大学・人間総合学部・特別研究員 (32627)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関